

TOKYO ホームページ

「コンドミのようないつでもどこでも、環境問題に取り組める仕組みを作りたい」

そんな思いから昨夏、地元足立区役所に一人で乗り込み、区内にある二平方メートルの休眠地を借り受けた。雑草が育の高さまで茂り、ごみの不法投棄が絶えない荒れ地だったが、近所に住む中高年者と共にNPO法人「足立グリーンアロジェクト」を発足させ、わ



「エコ農園」を舞台に環境問題に取り組む

平田 裕之 さん 29 (足立区六町)



都会の休眠地 緑の教材に

ずか四月で緑あふれる「エコ農園」に愛着が。ドラム缶にためた雨水と、各家庭で出たごみを使った堆肥で野菜を育てる。太陽光のエネルギで水を循環させる仕組みのビオトープの池や、ヒートアイラ

ンドを防ぐキウイ棚も設置した。「見える、学べる、手が出せる」という、実践的な環境教育の場を目指した」と語る。環境問題に関心を持つようになったきっかけは、米国の留学だった。カリフォルニアの大学で「野外教育学」を学び、土日は森で山下りのガイドをした。森は豊かだった。きれいな水がこんこんと湧き出る。樹木は神秘に満ち、自然の中で生きることの楽しさを実感した。

砂が崩れ、岩盤があらわになった山肌。胸にとけが突き刺さった気がした。東京に戻り、一年間、会社勤めを続けたが、「木や川を守る事が自分の使命ではないか」との思いが頭を離れない。退社して一人、環境保護を実践する活動に踏み出した。

「日本の森を知りたい」。一九九七年に帰国すると、全国の巨樹を訪ねる旅に出た。二年間にわたり、ヒッチハイクをしながら北海道・礼文島から沖縄・西表島まで歩き、木の隣にテントを張って、その雄大な姿を水彩絵の具で描いた。

自然と人間とが調和した関係に、満ち足りた生活とは何かを考えさせられた。一方で、存亡の危機に瀕する自然の姿をも目の当たりにした。枯れてマツチ樫のようになった松の一群。水量が激減し、魚のいなくなつた川。無理な植林で土

今、農園にはナスやトマトといった夏野菜の花が咲く。他の自治体やNPOの視察も多い。都会の一角で始まった小さな試みは、広がりを見せ始めた。「環境問題を考えることは、自分の生き方を振り返ること。これからは自然と人間とのよりよいかかわり方を考えていきたい。」